

第 21 回対照言語行動学研究会（JACSLA21）シンポジウム講演 概要

2023. 10. 14 開催 於 東京工業大学

タイトル	副詞を通して見えてくる古代語と近代語の相違
著者名（所属）	川瀬 卓 （ 白百合女子大学 ）
連絡先 E メール	skawase@shirayuri.ac.jp
論文内容	<p>本講演では、いくつかの副詞に注目して古典語と現代語を対照し、副詞を通して日本語の歴史にどのような時代的特徴が見えてくるのか考察した。まずシンポジウム全体の導入として副詞という品詞の概要を述べたのち、副詞から日本語史の流れを把握するこれまでの試みを紹介したうえで、「副詞の発達」と「呼応の分化」について考察した。</p> <p>副詞の発達については、川瀬（2023）にもとづき、認識的モダリティの副詞のうち蓋然性のやや低い推量タイプと推定タイプという 2 タイプが発達したと言えそうであること、行為指示や感謝・謝罪における対人配慮を表す定型的前置き表現や副詞が発達したと言えそうであることを述べた。また、大野（1993）や渡辺（1997）で示される、係り結びの衰退と副詞の発達を関連づける把握（係り結びが担っていた情意を表現する代替手段の 1 つとして副詞が発達したという把握）に対して、それがどの程度妥当と言えるのか実証的に検討する必要があることを述べた。</p> <p>呼応の分化については、川瀬（2023）で取り上げた仮定と可能性想定の変化に加えて、否定との呼応の問題を 2 点取り上げた。1 つは、程度性の表現において、現代語では肯定文で用いられる高い程度を表す副詞と、「あまり」「さほど」「たいして」のように否定と呼応して低い程度を表す副詞とに分かれていると思われる点である。もう 1 つは、「も」を構成要素に持つ副詞が、現代語では「少しも」「何も」「誰も」のように否定と呼応するようになっており、そのことと関連して、肯定文で用いられる「—でも」、否定文で用いられる「—も」という肯否の対応があるように見える点である。</p> <p>以上、まだ限られた範囲ではあるが、副詞を通して見えてくる古代語と近代語の相違を示した。個々の副詞それぞれの歴史変化が興味深いことはもちろんだが、それらを通して、日本語の歴史における時代的動向を探っていくことも、今後の重要な課題となるだろう。</p> <p>参考文献 大野晋（1993）『係り結びの研究』岩波書店 川瀬卓（2023）『副詞から見た日本語文法史』ひつじ書房 工藤浩（2016）『副詞と文』ひつじ書房 高山善行（2021）『日本語文法史の視界—継承と発展をめざして—』ひつじ書房 濱田敦・井手至・塚原鉄雄（2003）『国語副詞の史的研究 増補版』新典社（初版は 1991 年） 山口明穂（1976）『中世国語における文語の研究』明治書院 山口堯二（2004）「至近過去を表す副詞の形成」『佛教大学文学部論集』88: pp. 61-73, 佛教大学文学部 渡辺実（1997）『日本語史要説』岩波書店</p>